

## メディアへの視線をどう研究に位置づけるか

- 研究の射程と方法論をめぐって -

三宅和子 (東洋大学文学部日本文学文化学科)

### はじめに

2007 年度に国外研究で滞英した折に、ことばとメディアをめぐる国際学会・研究会に複数参加した。本発表はまず、この欧英の言語系メディア研究・学会の動向を中心に報告する。後半では、これからのメディアとことば研究にさらに必要となっていくことについて考え、ディスカッションの問題提起としたい。

## I. 欧英で参加したメディアとことば関係の学会・研究会

### 1. 第 2 回ことばとメディア国際学会

**Language Ideologies and Media Discourse: Texts, Practices, Policies**

言語イデオロギーとメディア談話：テキスト、実践、政策

プログラム：[http://www.leeds.ac.uk/linguistics/conferences/Lang\\_Media\\_07.html](http://www.leeds.ac.uk/linguistics/conferences/Lang_Media_07.html)

リーズ大学 (University of Leeds) 2007 年 9 月 3 日 ~ 5 日

招待講演者

- Richard Bauman (Indiana University)
- Jan Blommnaert (University of Ghent/Institute of Education, London)
- Monica Heller (OISE, Toronto)
- Adam Jaworski (University of Cardiff)

2005 年のことばとメディア国際学会 (Language and the Media conference) に続き、AILA (国際応用言語学会) での特別研究ネットワーク結成を経て、第 2 回言語とメディア国際大会がリーズ大学で開催された。テーマは言語イデオロギーとメディア・ディスコース。発表のトピックは以下の領域。

- 言語の標準化：Standard languages and language standards
- リテラシー政策：Literacy policy and literacy practices
- 言語習得と言語教育：Language acquisition and language teaching
- マルチリンガリズムと異文化コミュニケーション：Multilingualism and cross-cultural communication
- 言語と教育：Language and education

- 言語問題と社会階層、民族性、ジェンダー、セクシュアリティ、ライフサイクル、障害との関連 : Language issues in relation to class, ethnicity, gender, sexuality, life-cycle, and disability
- 言語とテクノロジー : Language and technology
- 言語とグローバル化 : Language and globalization
- 言語と専門的領域でのコミュニケーション : Language and communication in professional contexts
- 政治的談話 : Political discourse
- メディア談話におけるスピーチ、思考、記述の表現 : Representations of speech, thought and writing in media discourse

日本人研究者（英国をはじめ海外に居住する日本人）、日本関係の発表も興味深かった。

- **The use of media for Hawaiian language revitalization**, Toshiaki Furukawa(University of Hawai'i at Maona, USA)
- **Globalisation, performativity and anglicisms in Japanese popular culture**, Yasutaka Hiwatari(University of Leeds, UK)
- **An intercultural and multimodal discourse analysis of untranslated Japanese orthography in *Spirited Away***, Yoko Matsumoto-Sturt(University of Edinburgh, UK)
- **The discursive reconstruction of regional identity: Ulster Scots Language planning**, Yasuko Yamada(Lancaster University, UK)
- **Non-understanding as a heuristic to constructing cultural models**, Masataka Yamaguchi(University of Otago, New Zealand)
- **Language Ideology as top-down policy in Japan: discrediting early EFL Learning as cause of worsening Japanese ability**, Laurel Kamada(Aomori Akenohoshi College)

\*今回のテーマの影響もあり、公的メディア、マスメディア、政治との関連などを扱ったものが多かった。CMC はあまり多くなかった。メディアという範囲に絞った学会であったにもかかわらず、個人的には発表の種類が散漫に感じられたのはなぜだろうか。

## **2. 第 10 回国際語用論学会大会      10<sup>th</sup> International Pragmatics Conference**

プログラム : [http://ipra.ua.ac.be/main.aspx?c=\\*CONFERENCE2006&n=1295](http://ipra.ua.ac.be/main.aspx?c=*CONFERENCE2006&n=1295)  
Goteborg(ヨーテボリ)2007 年 7 月 8 日～13 日

テーマ : Language data, corpora, and computational pragmatics

招聘講演者 :

**Douglas BIBER** (Flagstaff, Arizona; pragmatics and corpora)

**Bill HANKS** (Berkeley; Maya discourse genres and missionization)

**Susan HERRING** (Bloomington; computer-mediated communication)

**Jan-Ola ÖSTMAN** (Helsinki; addressing Nordic language issues)

**Udaya SING** (Mysore; endangered languages)

**Yorick WILKS** (Sheffield; computational pragmatics)

【メディア関係の講演、発表】

招聘講演

**Susan Herring, The pragmatics in computer-mediated communication:  
Prospectus for an emerging research agenda.**

Panel: Forms of address in CMC and New interview

Panel: Computational pragmatics and dialogues, convened by Staffan Larsson & Robin Cooper, 3 sessions

Panel: Communication design in the internet age, convened by Ikuyo Morimoto

**Panel: Construction of interpersonal relationships in CMC – in the case of  
Japan, convened by Akira Satoh**

Panel: Communicating space, place and mobility, convened by Paul MacIvenny et al.

Panel: Appropriation of media texts, convened by Cornelia Gerhardt, 2 sessions

Panel: Les narrativites de mediatiques, convened by Marcel Burger

Panel: Corpora and methods in computer-mediated discourse analysis, convened by Michael Beisswenger and Jannis Androutsopoulos, 2 sessions

Panel: E-cohesion: Multimodality and interactivity in CMC, convened by Wolfram Bublitz et al.

Panel: The pragmatics of news production processes, convened by Tom Van Hout et al., 2 sessions

Panel: The pragmatics of human-computer interaction, convened by Kerstin Fischer 2sessions

Lecture session: New media

Lecture session: Newspaper language

Lecture session: Television

Lecture session: News discourse

Lecture session: Aspects of media discourse

Lecture session: Bulletin boards and radio talk

\*今回のテーマの一つにコンピューテーショナル・プラグマティックスが挙げられていたこと、招待講演者の一人が言語系 CMC 研究の牽引を進めてきた Herring であることからわかるように、CMC がようやく主要な言語系国際学会のテーマとして認められる時代に入ったという感があった。パネル、レクチャーセッションに CMC およびメディア関係の発表も多かった。他のテーマであっても、研究材料がメディアを介したものもかなりあった。

### **3. LDC Research Days**

ロンドン大学キングス・カレッジの Language, Discourse and Culture センターで行われている研究会 2008 年 2 月 27 日 (水)  
<http://www.kcl.ac.uk/projects/ldc>

開催者: Ben Rampton (ベン・ランプトン), Jannis Androutsopoulos (ヤニス・アンドロツォポロス), Alexandra Georgakopoulou (アレクサンドラ・イェルガコポロ) など

テーマ: ニューメディアとポップカルチャー

#### **【データセッション】**

「都市における教室文化とインタラクション」 アレクサンドラ・イェルガコポロ、ローレン・スモール

#### **【ディスカッション】**

「CMC と社会言語学」 ヤニス・アンドロツォポロス

#### **【講演】**

「ことばとメディアを考える: 談話、テクノロジー、インターアクション」 Simeon Yates  
シミオン・イエイツ (シェフィールド・ハラム大学教授)

\*大学院生を率いた小さい集まりながら、キングスカレッジという社会言語学、CMC が盛んな、生きのいい研究がおこなわれている場所での、刺激的な集会であった。ここでは現在、大きなプロジェクトとして、ロンドンに生きる青少年の生活とポップ・カルチャーやニューメディアに関する大型プロジェクトが進行中である。

アレクサンドラ・イェルガコポロの発表は、それを踏まえたもので、下町に住む移民を含む少年少女が自己のアイデンティティ、人間関係などとメディアをどう交差させて生活しているかの調査の一部であった。

いっぽう、ヤニス・アンドロツォポロスの発表は、言語的 CMC 研究が現在抱えている挑戦 (第 3 の波) にどのように立ち向かうかという現在進行形の思考錯誤を伝えるものであったといえよう。すなわち、サイバースペースに際限なく広がるマルチメディア性やその住民の時間と空間を超えた領域での様々なつながりが、従来の言語研究、社会言語学研究の方法論ではもはや把握しきれなくなっていることを踏まえ、その打開として何ができ

るかを考えるというものであった。

最後の講演のシミオン・イエイツは社会学、コミュニケーション学の領域でケータイのコミュニケーションを研究してきた立場から、電話というメディアの発達史を踏まえつつ、ケータイを使ったコミュニケーションの特徴を考えるという趣旨のものであった。

## Ⅱ．広がる言語系のメディアとことば研究の射程

### 1. 言語系研究の拡散と収斂

現在、「メディア」で括られた言語系研究の対象は大きな広がりを見せている。マスメディア（新聞、雑誌、テレビなど）の研究、電子パーソナルメディア（Eメール、ケータイ/電話など）の研究、サイバースペースの新たなマス/パーソナルメディア（掲示板、チャット、SNS、HP、ブログなど）研究が増加している。加えて、文字・視覚メディアと音声メディアなどのマルチメディア、マルチモダルな対象、道端の看板やサイン、道路標識なども含む言語景観を論じる研究など、多種多様である。今後、拡散と収斂の両方向性で研究が進んでいくのではないかと考えられる。

CMC に限定して考えていくと…拡散の例としては、あるファンサイトの書き込みメンバーが on/off でどのようなつながりを持っていくのか経年変化をみる、サイバーコミュニケーションに研究者自身が参加しつつ、ある時期から個人にアプローチしていくような Ethnography of communication 的なアプローチ、パソコン操作の過程までも研究の過程として取り込んでいくアプローチ、文字・記号情報のみではなく、音声、ビジュアル要素、配置、リンクのされ方などサイバースペース全体を研究するなど、マルチメディア、マルチモダルな拡大の仕方などが考えられる。

収斂とは、（うまく把握できた表現ではないが）あくまで言語にこだわり従来の研究成果と結び付けていくことをいう。たとえば、メディア上のディスコースをこれまでのディスコース分析と関連づけて比較検討する、あるいはメディア上の発話行為がどのような形で行われるか、語用論的研究を比較するものなどが考えられる。

このどちらにおいても、「メディアそのものへの視線」をこれまで以上に意識することが必要なのではないかと思う。すなわち、当該のコミュニケーションが行われる場としてのメディアとその特性への鋭く執拗な視線である。メディアを介することにより、どのようなものが生み出され、どのようなものが失われているのかという視点である。それなくしては、例えば CMC 研究と称しても、単に新しい場と材料を獲得して従来通りの言語研究を行っているに過ぎない。新しい場の特性を注視することにより、従来の言語研究では見えにくかったコミュニケーションの側面を炙り出すことができるのではないだろうか。

### 2. メディアに視点を注ぐということ

これまでもメディアを材料とした研究は多数あった。たとえば、日本語の語用論の研究

では、「褒め」や「依頼」「依頼の断り」「謝罪」などの発話行為がどのように行われるのか、その種類はどのようなものがあるかなどの研究が盛んに行われた。その研究の材料として、TV ドラマや小説からその材をとり学会誌にも掲載される。この中で、研究方法や分析の仕方としては優れているにもかかわらず、どのようなメディア上でのディスコースであるかといった視点が欠如/希薄なものがしばしば見られた。いかに日常的なドラマや小説であっても、作者があり、メディアを通すことによってさまざまな操作が行われるはずである。たとえば、生の日常では繰り返される挨拶や意味なく見えるしぐさは、ドラマや小説に書きとめる意味を持たない。また視聴され読まれるフィクションには、その進行に都合のいいように人物が配置され、喋らされ、排除される。非日常の物語であり、ふるまいであるからこそ、ドラマとなり小説となり面白いわけだ。日常生活が描いてあるからといってそれが私たちの日常と同様だと考えるのは明らかに「メディアを介す」ということの意味を無視していると考えられる。

電子メディア上の言語研究においても、メディアの特性がどのようにコミュニケーションに影響しているかという視点は大切だ。三宅が行っている「謝罪メールへの応答」の研究を例に考えてみる。ここでは謝罪を受け取る側の反応に関して、謝罪の評価や謝罪メールへの返答のストラテジーなどを分析しているが、メディアを介することによって可能になっている人間関係の調整操作に注目している。すなわち、顔を合わせなくてよい、即座に反応しなくてよいといったケータイのメディア特性が、これまでの対面インタラクションとは異なるコミュニケーションを可能にしているという視点である。一般にはパラ言語、非言語情報が欠落することによる制約、それを代替するものとしての絵文字顔文字の頻用がしばしば指摘される。しかし、これらのヴィジュアル情報は、一方で「相手まかせ」の解釈や、実際に感じていることとは反対のことを受け取らせる、あるいは誤解してとることを半ば期待しているかような操作の傾向がみられる（三宅 2005 にも指摘）。以下のようなやり取りが対面では成り立ちがたいのに、ケータイメールではそれほど不思議ではなくできてしまうのだ。「実際に話しているように書く」ととらえられがちだからこそ、この操作可能性は見過ごされがちであり、注視すべき要素なのではないだろうか。

<謝罪メールのディスコース> \*B の 2 例は回答者が謝罪者に対して不快感、不信感があると答えたにもかかわらず、楽しそうなメール。ただし、普通体のくだけた文体に謝罪メールに丁寧体で返信している。

A: ごめ〜ん寝坊しちゃった 🌸🌸 電車に乗り遅れたんで 30 分遅れます…ほんとーにゴメンね !!

B: 大丈夫ですよ 🌸 着いたら連絡下さい 🌸

B: わかりました 🌸🌸 なるべく早く来て下さいね 🌸 🌸

電子メディアに限らず、メディアの特性がどのようなものであるか、それがどのような情報・関係操作を可能にしているのか、あるいはコミュニケーションの形をどのように変

えているのかといった視点は、言語系のメディア研究にとってこれからもますます重要なものになっていくのではないだろうか。